

---

生活文化創造都市推進事業

生活文化創造都市フォーラム  
「岡山地域会議」

---

実施報告書



2024年 3月

一般財団法人 日本ファッション協会



## はじめに

一般財団法人日本ファッション協会では、地域振興事業として、平成 15（2003）年度から「生活文化創造都市推進事業」に取り組んでいます。

これは、欧米から始まり、今や世界で 350 以上の都市が目指している都市モデル「創造都市=Creative City」をベースに、地域独自の文化に根差した市民の活発な創造活動こそが豊かな生活文化を育み、産業の振興にもつながるとの認識のもと推進している事業です。

今年度は、まちづくりシンポジウム「生活文化創造都市フォーラム」を岡山市、岡山市文学賞運営委員会と岡山商工会議所との共催で、令和 6 年 1 月 15 日に、岡山商工会議所大会議室で開催いたしました。この報告書はその内容をまとめたものです。

皆さまには、ぜひご高覧いただき、これからのまちづくりのご参考にしていただければ幸いです。

令和 6 年 3 月  
一般財団法人 日本ファッション協会







## 【開催概要】

タイトル：生活文化創造都市推進事業  
生活文化創造都市フォーラム「岡山地域会議」  
開催日時：令和6年1月15日（月）14：00～16：30  
会場：岡山商工会議所 1F 大会議室（岡山県岡山市北区厚生町3-1-15）  
主催：一般財団法人 日本ファッション協会  
共催：岡山市、岡山市文学賞運営委員会、岡山商工会議所  
後援：日本商工会議所  
テーマ：「文学創造都市岡山～文学による心豊かなまちづくり～」の  
推進に向けて  
参加費：無料  
参加人数：約50名

## 【プログラム】

### 主催者代表挨拶

一般財団法人 日本ファッション協会 専務理事 間部 彰成

### ホストシティ代表挨拶

岡山市長 大森 雅夫氏

### 基調講演

「世界の創造都市と岡山市の可能性」  
創造都市ネットワーク日本 顧問  
大阪市立大学名誉教授

佐々木 雅幸氏

### パネルディスカッション

「文学による心豊かなまちづくりの推進に向けて」

#### ◆コーディネーター

横浜市立大学大学院 都市社会文化研究科 客員教授

野田 邦弘氏

#### ◆パネリスト（五十音順）

北九州市立文学館 館長  
豊岡市観光文化部観光政策課 参与  
豊岡演劇祭アドバイザー  
編集者・吉備人出版 代表  
文学創造都市岡山推進会議

今川 英子氏

田口 幹也氏

山川 隆之氏





## 主催者代表挨拶

一般財団法人 日本ファッション協会  
専務理事 間部 彰成

皆さんこんにちは。日本ファッション協会の間部でございます。

初めに、ご案内のとおり、年始早々、大変大きな地震がございました。亡くなられた方も多数いらっしゃいます。心からご冥福をお祈り申し上げますとともに、被災された方々に心からお見舞いを申し上げたいと思います。

さて、本日岡山地域会議を開催いたしましたところ、お集りをいただきまして誠にありがとうございます。

私共、日本ファッション協会は、まさにファッションに関する情報発信や、あるいは産業振興が、大きな仕事でありますけれども、一方で、生活文化すべてにかかわるものをファッションと捉えておりまして、ファッションを通じた国民生活の向上、あるいは地域振興、こういったことも私共の大きな役割と捉えさせていただいております。

こうした考えのもとで、各地域の特性や独自の文化を生かした取り組みに少しでもお役に立てればと、こういった会議を毎年1回でございますけれども、各地域で開催させていただいております。

ご案内のように、岡山市におかれましては、昨年ユネスコの創造都市ネットワークにおいて、文学部門で加盟の認定がされたところでございます。文学部門での加盟認定というのは、国内で初というふうに伺っております。今後、文学創造都市ということで、取り組みを進められます岡山市のご発展に、今回のシンポジウムがいささかなりとも貢献できれば幸いと考えているところでございます。

今回のシンポジウムの開催にあたりましては、岡山市の皆さん、また岡山商工会議所の皆さんに大変にご尽力いただきました。

高い席からで恐縮でございますけれども、皆様方に心から御礼を申し上げまして、簡単でございますが、冒頭のご挨拶とさせていただきます。

今日はどうぞ1日よろしく願い申し上げます。ありがとうございました。



## ホストシティ代表挨拶

岡山市長 大森 雅夫 氏

皆さんこんにちは。岡山市長の大森でございます。

今日は、岡山地域会議にお集りいただきまして、ありがとうございます。

佐々木先生に、これから「世界の創造都市と岡山市の可能性」についてご講演いただけるということで、よろしくお願いしたいと思います。

それから「文学による心豊かなまちづくりの推進に向けて」をテーマに、野田先生をコーディネーターとするパネルディスカッションもよろしくお願いいたします。

実は、私、市長になったのが10年前になりますが、最初に坪田譲治文学賞の選考委員会に参加させていただきました。そのとき、選考委員長が五木寛之先生でありまして、五木先生から呼び止められ、何をおっしゃるのかなと思いましたが、岡山市に坪田譲治文学賞をやめてもらっては困ると言われました。やめるとは一言も言ってなかったのですが。

実はそのときに、いくつかの自治体が財政難ということもあって、文学賞を切り詰めるということがありました。私は市長になった早々なので、そういうことは考えたこともなかったのです。

岡山市では、この坪田譲治文学というものが、市民の童話賞などさまざまな形で市民の間に根付いてきているという感じがしていました。それは全体の中では、一部かもしれませんが、今の岡山にとって、坪田譲治文学賞をずっと継続し、また、さまざまな文学の試みを続けていくことが、必ず何等かのことに結び付くのではないかと考えていました。

その中で、ユネスコの創造都市ネットワークというものが存在するということを知りまして、手を挙げてみようではないかということになりました。加盟して具体的に何が起こるのかということ、今後の話になりますけれども、今、私が承知している限りでも、海外の幾つかの都市からお誘いがあります。オーストラリアのメルボルンや、隣の韓国のプジョンからもあります。またユネスコからは、ニュージーランドの有名な景勝地ミルフォードサウンドの近くに、ダニーデンという都市があるのですけれども、そこと一緒にやってみないかという話もあります。

それがいったい何を生み出すのかということが、はっきりしないところはあるのですけれども、そういうことをやることによって、大化けする可能性もあるし、大化けしなくても何等かの化学変化が起こってくるのではないかと、非常に楽しみにしているわけであります。

この間も文学の関係者と話をさせていただきましたが、皆さんいろいろな構想をお持ちです。それが、ユネスコのネットワークに入ることによって花開く可能性がある、開かなくても、ずっと開くのを待っているというのも決して悪いことではないし、そういう動きになればいいと思います。1年や2年ではそう変わらないかもしれませんが、これも息長くやっけていながら、節目節目に大きくしていくことを目指していきたいと思っております。

本日の基調講演およびパネルディスカッションで、そういうヒントをいただければ幸いです。

よろしくお願いいたします。

## 基調講演

佐々木 雅幸氏



創造都市ネットワーク日本 顧問  
大阪市立大学名誉教授

1980年より大阪経済法科大学、金沢大学、立命館大学、大阪市立大学、同志社大学で教授を勤め、2020年4月より2024年3月まで金沢星稜大学特任教授、学校法人稲置学園理事。

創造都市研究の日本とアジアにおける第一人者。創造都市ネットワーク日本の顧問として、ユネスコや全国各地の創造都市の取組を支援。日本都市学会賞、金沢市文化賞受賞。

著書に『創造都市への挑戦：産業と文化の息づく街へ』など

## 「世界の創造都市と岡山市の可能性」

創造都市ネットワーク日本 顧問  
大阪市立大学名誉教授  
佐々木 雅幸氏



皆さん、こんにちは。佐々木でございます。今日はお時間があまりないので、少し急いでお話したいと思いますが、岡山は地震がないので、安心してお話することができます。

正月元旦から金沢にいましたので、ご存じのように地震に見舞われました。余震が一日に何回もあり、だんだん頭が揺れて来るんですよ。揺れていなくても揺れているような気がするのですが、さすがに岡山にきたら安心して頭の揺れがなくなりました。

さて、皆さん、このロゴマークをご存じですよ。岡山市では、ユネスコの認定を受けてから、「文学創造都市おかやま」というロゴマークをつくられたということです。

一昨年秋に、「岡山芸術交流」が開催されたときに、こちらに参りました。そのときに、岡山市が文学という領域でユネスコの創造都市ネットワークに、加盟を考えているので、協力してほしいと言われました。日本ではすでに10都市が加盟しているのですが、私は実は、ほとんどの都市の申請段階から応援をさせていただいておりました。岡山の場合、世界の文学都市としてどういう特徴が打ち出せるのかなと思いました。つまりストーリーですね。ストーリー性がないと、ただ自分たちは文学を大事にしているというだけでは、訴える力がありません。

それで「世界的に評価されるような文学者、あるいは文学賞、そういったものがございますか」と尋ねたところ、先ほど市長も言われましたが、坪田譲治文学賞が39回ということ



になっていますということでした。つまり児童文学という領域で伝統があると、この町は少なくとも日本で一番筋の通った事業を展開してこられたということですね。これは海外でどんなふうに評価されているのだろうか、よく調べてみたところ、ノートルダム清心女子大に研究者の方がおられて、坪田さんのコレクションがあるのですね。これはいいなと思っています。なぜかという、ユネスコの本部はパリにあるので、フランス語圏での影響力ということが重要です。さっそくノートルダム女子大の関係者の方に連絡を取ってもらいました。

それから、今日は出版社の方もおられますが、やはり童話というものは、桃太郎から始まり、つまり古い「吉備」というエリアは、日本の中では非常に古いストーリー性というものを持っているエリアだと強調してもらいました。

この町が、少子高齢化、特に子供たちが少なくなっていく中で、活力を維持するためには、どういう形でも、この児童文学を軸にしたまちづくりというものにチャレンジする必要がある。そしてこれはおそらく世界のどの都市とも共通点がある。つまり先進国の都市であれば、当然そういうことになるので、そのあたりを軸にして申請書を書いていこうという作戦を練りました。

それから非常に心強い応援団がいて、先ほど市長も言われましたけれど、プチョンという韓国の都市があって、ここが岡山市より先に、ユネスコのネットワークに文学の分野で加盟をしています。私はユネスコの会議によく出るのですが、そこでそのアドバイザーをしているソウル国立大学の教授が私のところにやってきて、「日本はいつになったら文学の領域で創造都市ができるのか。もし候補があったら応援するから言ってくれ」と言われたことがありました。

そういった意味では、いろいろ追い風もあったと思います。これから残りの時間で、岡山市にどういった創造都市づくりをしていただくのかということと一緒に考えたいと思うのですが、私が知る限りの創造都市というものの考え方、それから世界の代表的な創造都市、これはいったいどういったことをやっているのかということと、あとは国内の都市の話も少しさせていただきます。これを普通にやっていきますと、大学の講義で何日間もかかるものですが、それを35分バージョンでやっていこうと思います。

まず、創造都市ということで、勉強されたい方は、岩波現代文庫から『創造都市への挑戦』という本を出しておりますので、ぜひお買い求めください。一言で創造都市とは何かといえ、市民一人一人が創造的に、働き、暮らし、活動する都市」ということになります。

こういう考え方が、どうして出てきたかということ、かつて21世紀の冒頭に世界の大きな枠組みの変化があるだろうと言われていました。それは製造業が行き詰って、新しいクリエイティブな産業群というものが、さらに都市や国のリーダーが出てくるだろうということです。今のGAFAGがそうなのですが、そういう中で、都市の在り方もこれまでとは違うものになるだろうと言われていました。つまり大きな工場があれば、都市が発展するのではなく、クリエイティブな人たちが集まることによって、都市が発展するのだという考え方に行きついて、イギリス人のチャールズ・ランドリーさんと、アメリカ人のリチャード・フロリダさん、そして私も同じ時期に『創造都市への挑



戦』という本を書いております、これが 21 世紀の新しい都市論だとされました。

日本政府はその後 20 年経って、やっと society5.0 ということを言い出して、創造性と想像性が大事だと、これからは情報社会を超えてもっと大事な創造社会を構築すると言いだしています。我々の後を追いかけてきたと考えております。

ひとことで 20 世紀と 21 世紀を大きく分けると、大量生産・大量消費に基づく工業社会から、個性的な文化的消費を軸にする創造社会に変わるのでですね。そうなったときに、都市の在り方も変わります。大きなものづくりをする工場よりは、むしろクリエイティブな考え方をする企業の集まり、あるいはそういう人々が活発に活動できるような都市というものが大事になってきます。イギリスではチャールズ・ランドリーさんがそのチャンピオンで、ランドリーさんは『THE CREATIVE CITY／創造都市』という本を書いて、イギリスの創造都市政策、ヨーロッパの創造都市政策といった新しい政策領域をどんどんつくっていきました。

リチャード・フロリダさんは、アメリカで「創造階級／クリエイティブ・クラス」というものがこれから都市の中心になるという考え方を提唱しました。「クリエイティブ・クラス」という人たちが集まる場所はこういったところかという、実は、ゲイ、レズビアンの人たちが活動できる場所、つまり多様な生き方を認め合い、多様な考え方を認め合う、そういう社会がクリエイティブ社会に近いと言いました。その代表がサンフランシスコであり、サンフランシスコ湾を下ったところにあるシリコンバレーであって、GAF A の本社は全部ここにあるわけです。

つまりアメリカの東海岸のように古いエスタブリッシュな人が集まっている場所ではなくて、西海岸というのはまったく自由で、サンフランシスコは、アメリカで最初にゲイ、レズビアンの結婚が認められるということになって、こういう社会の潮流と創造都市は、一体のものとして出てきました。

こういった中で、ユネスコが 2004 年から創造都市ネットワークというものを世界に呼びかけまして、現在では 350 の都市に広がってきました。日本でも神戸、名古屋、金沢から始まって、今、岡山が 11 番目ということになりました。

ユネスコの場合、創造都市は 7 つのジャンルを指定して、そのジャンルごとに加盟申請を受け付けています。日本では、名古屋と神戸がデザイン、金沢がクラフト、浜松が音楽、札幌がメディアアート、鶴岡と臼杵がガストロノミー・食文化ということできたのですが、文学都市がなかなか出てこない、ということがありました。私も何度か京都の市長さんに働きかけたり、北九州の市長さんに働きかけたりしたのですが、なかなか決断してくれなくて、そうこうしているうちに岡山市の方から、やってみようという話がありました。「それでは、やってみるか」というような、どちらかという非常に軽いノリだったと思いますね。でも、それがよかったと思いますよ。待たれていたのですね。それで昨年 10 月末にうまく決まりました。

ユネスコは国連の専門機関の一つですから、やはり SDGs というものを 2030 年までの目標にしており、芸術文化の領域から SDGs にアプローチしていくことを提唱しています。

実は、北九州市の前の市長、北橋さんは、SDGs の専門家会議に行かれて、目標が 17 というのはおかしいのではないかと、文化が抜けているから 18 番目をつくって、文化芸術を入れろと言っ





たらしいのです。これは絶対「正解」ですよ。本当は18あったほうが良いというぐらいの思いで、創造都市ネットワークはやっているということになります。

ここから、私の目から見て、これぞ、ユネスコ文学都市という都市を少し紹介したいと思います。まず、最初はスコットランドのエディンバラです。イングランドではありません。スコットランドです。エディンバラはスコットランドの中心都市です。このまちが、ユネスコの文学分野の最初の都市なのです。それだけ強い自負心があります。ユネスコの世界遺産として旧市街が95年から指定を受けておりますし、私も一度だけ通ったことがあるのですが、エディンバラ城という素晴らしいお城があります。ここの何がすごいかというと、「エディンバラフェスティバル」という世界で最も有名な、夏の間に行われる総合芸術祭があることです。

私の友人は演劇関係者が多いものですから、大概エディンバラ芸術祭には出かけています。世界中の演劇関係者が皆そこに集まって、討論したり、1年間の作品を買い付けたりしています。その中で、文学祭も一緒に行われています。音楽祭も行われる。町中で、まさに城の前の広場やホールなど、いろいろなものを使って、世界中から観光客が集まってきます。夏の間だけで、1年間の外貨が獲得できるというぐらいの規模になっています。

岡山市は、幸いと言いますか、コンサートホールもあり、つい去年の秋には、ハレノワができてオペラができますし、いくつかの大中小のホールがあります。文学都市として、総合的な芸術祭をやるための施設が揃ってきましたね。文学というと、本だけではない。演劇だってシナリオがあって、ドラマがあってということでは文学なのです。そういうものを広げてとらえていったときに、岡山が本を中心にして芸術のお祭りを展開していくような形の岡山芸術祭を行う。今、「芸術交流岡山」は、現代アートのお祭りですが、これも全部巻き込んだらいい。岡山は、これをずっと広げて展開するのがいいなと思います。エディンバラにぜひ行って、体感してほしいです。

それから、先ほど市長さんも言われましたが、オーストラリアのメルボルンです。私はメルボルンに、2回ほど行ったのですけれども、メルボルンがエディンバラに次いで、文学の領域で創造都市になったのです。なぜ、メルボルンが入ったのかというと、私がそれまで持っていたイメージとは違っていたのですが、オーストラリアというのは、アポリジニーの人たちのいわゆる多文化共生の町です。コミュニティアートのような、ストリートアートが盛んなのですけれども、多文化共生の町として、オーストラリアの中ではカフェ文化が発祥した街です。そして文学の中心としては、ビクトリア州立図書館という立派な図書館があります。ビクトリア州の州都の図書館です。こういうところを中心として文学フェスティバルが行われていて、たとえばメルボルン・ライターズウィークフェスティバル、それからレア

### ユネスコ文学創造都市:エディンバラ

エディンバラフェスティバル1947~  
エディンバラ国際文学祭 Book Festival  
エディンバラ国際映画祭  
国際児童フェスティバル



### ユネスコ文学創造都市:メルボルン

ビクトリア州の州都  
多文化共生の都市  
アートとカフェ文化発祥の街





ブックウィークなど、いろいろな本に関わる、あるいはライターに関わるイベントが、図書館を軸にして展開されています。

実はユネスコへの申請書をつくっているときに、岡山で全国一のものが、何かないかと聞いたところ、図書館に配置された専門職員の割合、これは日本で一番高いと聞きました。図書館というのは、やはり文学、本、これを展開する軸ですよ。そうすると、全国図書館フェスティバルや会議というようなことを展開していてもいいのではないかと、メルボルンにはそういうヒントがあるのではないかと思います。

それからスペインのバルセロナです。私はバルセロナが大好きで、よく行きます。バルセロナというのは文学都市というイメージはあまりなく、むしろ現代アートだったり、ピカソ、ダリ、ミロという巨匠が生まれた街で、ガウディの建物があったり、芸術のあらゆる分野を持っている街です。

バルセロナは、文学を柱としてあらゆる芸術に広がっているというところが、いいと思っています。そしてこの街のよい点は、さまざまなインパクトのある世界的なイベント、アートイベントを展開してきたということだと思います。

私は2004年のユネスコが創造都市ネットワークを提唱した年に、ここで行われた Universal Forum of Cultures という世界会議に招かれたことがあります。そのときに、アマルティア・センという方が、

「文化というのは人々のアイデンティティを確かに育む。だけれども、アイデンティティとアイデンティティがぶつかり合ったとき、たとえばブッシュ大統領のアイデンティティと、イラクのフセイン大統領がぶつかり合ったときに戦争になってしまう。それを回避するマルチプル・アイデンティティ、そういう多元的なアイデンティティというものが必要なのではないかと」ということを提唱したのです。

いろいろやってほしいことばかり言いますが、世界に岡山から発信できるものは何かということや、をぜひ考えて、「文学のまち岡山」というものをこれから世界的なレベルで考えていただくと、よいと思います。

ここからあとは、文学都市ではないのですがユネスコ創造都市の事例をご紹介します。デザインの分野ではモントリオールという街があります。モントリオールというのは、カナダの中ではフランス語圏の首都といってもよいところです。ここは、「カルチュアデイ」というものを設定しまして、カルチュアデイには市内の文化施設がすべて無料になります。そして「文化をすべての人のために」というイベントがあります。同時に国連の生物多様性条約、モントリオール議定書を定めました。文化多様性ということと、生物多様性というのは、関係がありまして、モントリオールでは今、生物文化多様性ということを提唱しています。先ほどのバルセロナもそうですけども、やはり世界にどういった新しい展開を、考え方をひろげるかということも考えていただきたい。

それからイタリアのボローニャです。わたくしは20年前にボローニャ大学に留学していたものですから、この話でしたら何日でもできるのですけれども、ボローニャから学ぶことは何かと



いいますと、このまちはオペラのまちなのです。オペラというのは、オペラハウスで行われるオペラもそうですが、町に住んでいるさまざまな職人が行う仕事、これがオペラなのです。オペラはその意味では、人々が創造的にものをつくることです。だれかに命じられていやいややる仕事、これは「ラボーロ」といって奴隷がやることなのです。創造的な仕事でまちができる、その一つがオペラハウスのオペラで、そこが、ユネスコ音楽都市として世界のリーダーになっているわけです。

それから小さな町ですが、アメリカのニューメキシコ州の砂漠の中のアオアシスのような、サンタフェというまちがあります。そこが、クリエイティブ・ツーリズムという新しい体験型のツーリズムを提唱し、特にクラフトを観光客と一緒に作る、クラフト・ツーリズムを発展させてまいりました。

日本では、2001年から金沢で創造都市会議が始まり、2004年には横浜にもこれが広がって、そのずっと後に、主要都市で創造都市という流れができて、昨年11月にユネスコに岡山が文学で加盟するということになりました。10年前になりますが、国内的には創造都市ネットワーク日本というものをつくりまして、現在のところ122自治体、まもなく124になりますが、そういう数の自治体が参加しています。

金沢では創造都市推進のための会議を、経済同友会という経済人の集まりが主宰しまして、市長さんと対話をしながら創造都市を進めてまいりました。2004年に21世紀美術館をつくり、最近ですと、国立工芸館を金沢に誘致しました。それからユネスコの会議、全世界の総会というのがありますが、2015年に日本で初めて、金沢市がこれを開催しました。岡山が今度やってくれてもいいですよ。都市数が350という大変な数になっていますが。国立工芸館を金沢に誘致したことによって、今や、工芸文化の首都というようになっていっています。

横浜の場合は、クリエイティブシティヨコハマ構想が2004年に始まり、特に臨海部における創造界隈を形成し、創造産業を集積させるという成果を上げてまいりました。その中心として、「横浜トリエンナーレ」という現代芸術祭を開催しています。「芸術交流岡山」であったり、あるいは瀬戸芸があったり、そういったものはしりでした。2014年に、横浜から「東アジア文化都市」が始まっておりますが、北九州市に2019・20と2年連

### ポローニャ ユネスコ音楽都市へ

職人のオペラとオペラハウス  
 ペルディ・ロッシェニが活躍 ポローニャ歌劇場

ジャズ  
 現代音楽グループ  
 音楽博物館  
 若者オーケストラの  
 スタートアップ

元スーパーマーケットを練習場に

### 工芸文化首都金沢へ 2020

金沢創造都市会議の提唱が実を結び、国内外の工芸作品3000点以上を収蔵する国立近代美術館工芸館が移転され「国立工芸館」としてオープンした。九谷焼や加賀友禅、輪島塗といった伝統工芸が盛んな土地柄や北陸新幹線の金沢延伸による交通アクセスの良さが認められた。  
 兼六園周辺に立地することにより、県立美術館や伝統産業工芸館、金沢21世紀美術館との相乗効果が生まれる。

### 東アジア文化都市

年	日本	中国	韓国
2014年	横浜市	泉州市	光州広域市
2015年	新潟市	青島市	清州市
2016年	奈良市	肇波市	濱州特別自治道
2017年	京都市	長沙市	大邱広域市
2018年	金沢市	ハルビン市	釜山広域市
2019年	豊島区	西安市	仁川広域市
2020年	北九州市	揚州市	順천시

続開催していただきました。これもヨーロッパの欧州文化首都と連携しながら進めていきたいということになりますね。北九州市は、今日もお見えになっておりますけれども、アート for SDGs という非常に挑戦的な取り組みをされているところです。

都市のみならず、農村部でも創造都市的な取り組みが始まってきましたので、私はあえて「創造農村」と呼んでおりますが、丹波篠山がやはりユネスコに加盟をしております。それから山形県の鶴岡市が入っております。こういう流れの中でどんどん小さなまちでも展開が進んでおりまして、今日お見えの城崎が「城崎国際芸術祭」というものを展開するようになり、平田オリザさんの新しい芸術文化観光専門職大学という大学ができましたので、案外、小さな世界都市というのが、城崎国際演劇祭を軸にして豊岡で展開することもあるのではないかと考えております。

以上駆け足で話を進めてまいりましたけれども、最後にこれから岡山市に目指していただきたいことを箇条書きにしておりますので、ぜひ取り組みを進めていただきたいと思っています。

やはりなんといっても、文学を中心に置くのだけれども、文学の周りにさまざまな芸術の領域を広げていって、そして総合的な芸術祭のようなものを岡山で毎年なり、隔年なり、3年に1度なりできないかということで、新しい創造都市岡山モデルというものをつくりだしていただきたい。その原動力は人々の日常的な創造的な生き方です。市民の創造的な参加というものを軸にして、ぜひ挑戦していただきたいと思う次第です。

本日は、どうもご清聴ありがとうございます。

## 文学創造都市岡山の発展に向けて

第1に、文学を中心に市民とともに創造的なまちづくりをすすめる、ユネスコネットワークに貢献する。

第2に、地域の文学的伝統を継承するとともに、若手作家や次世代の文学の担い手を養成し、文学出版関連の創造産業を発展させる。

第3に、岡山芸術祭を総合的に発展させて、文学と演劇・音楽・映画や美術・デザイン、観光業などと融合して、創造産業群を作り出し、持続的な地域発展をめざす。

第4に、児童文学を発展させ、子育て環境を豊かにし、持続的で健康な社会に向けて貢献する。

第5に、地球環境を保全し、飢餓と貧困のない、グローバル社会、SDGs実現に向けて貢献する。



## パネルディスカッション

### ◆コーディネーター

野田 邦弘氏



横浜市立大学大学院 都市社会文化研究科 客員教授  
東京大学まちづくり大学院 非常勤講師  
茅ヶ崎文化生涯学習プラン推進委員長

2004年まで横浜市職員として主に文化行政に携わる。2003年には横浜関内地区再生に向けた都市政策「クリエイティブシティ・ヨコハマ」の策定を担当。翌年新設された文化芸術都市創造事業本部創造都市推進課の初代担当課長に就任し、横浜トリエンナーレ 2005を担当した。2005年鳥取大学地域学部教授に就任、2021年より現職。文科大学非常勤講師、文化経済学会〈日本〉理事（元理事長）。東京大学まちづくり大学院非常勤講師、茅ヶ崎市文化生涯学習プラン推進委員長。著書は『アートがひらく地域のこれから—クリエイティブシティを生かす社会へ』（共著）『文化政策の展開』『創造都市横浜の戦略』『イベント創造の時代』など

### ◆パネリスト(五十音順)

今川 英子氏



北九州市立文学館 館長

福岡県生まれ。日本女子大学大学院修了後、日本女子大学、学習院大学兼任講師、昭和学院短期大学助教授、北九州市立文学館副館長、北九州市企画文化局理事を経て2012年4月より現職。九州国際大学客員教授。編著に『林芙美子 巴里の恋』他。その他、共著、評論、解説など。「林芙美子生誕100年展」「同110年展」の全国巡回展の監修。北九州市立文学館設立当初より企画・運営の他、北九州市の文化振興に携わる。全国文学館協議会幹事

田口 幹也氏



©中川正子

豊岡市観光文化部観光政策課参与

豊岡演劇祭アドバイザー

1969年生まれ。上智大学卒業後、(株)QUICK、日本IBMなどを経て起業。飲食店経営やサッカー専門紙の立ち上げにも携わる。2011年東日本大震災を機に、故郷である兵庫県豊岡市に家族で移住。肩書「おせっかい。」の名刺で、豊岡市の広報・PRなどで奔走、NPO法人本と温泉の設立にも参画。15年城崎国際アートセンター館長に就任、21年館長退任。現在は豊岡市観光文化部観光政策課参与と豊岡演劇祭のアドバイザーを務める。

山川 隆之氏



編集者・吉備人出版代表 文学創造都市岡山推進会議

1955年岡山市生まれ。三重大学農学部卒。伊勢新聞記者、生活情報紙「リビングおかやま」編集長を経て95年に(株)吉備人を設立。『絵本のある暮らし』『のれん越しに笑顔がみえる』『愛だ！上山棚田団一限界集落なんて言わせない！』などの編集を担当。これまでに約820点を出版。日本出版学会会員。2012年度福武文化賞奨励賞、2013年度岡山市文化奨励賞を受賞。著書に『岡山人じゃが』、『聞く、書く。』『シネマ・クレール物語』（共著・吉備人出版）など

## 「文学による心豊かなまちづくりの推進に向けて」



**野田** 野田と申します。改めまして、今日はよろしくお願いたします。

簡単に自己紹介をさせていただいた上で、司会役に徹しようと思えます。私は福岡の博多で生まれまして、高校までは福岡におりました。東京の大学に入って、卒業後、横浜市役所に入りました。27年間勤めましたが、非常に出来の悪い公務員でございまして、好きな仕事はやるけれども、嫌いな仕事は手を抜くという一番だめなタイプだったのです。

後で、そうだ、出世しなければこれで退職までいけるじゃんと思いきまして、社会教育主事という専門職があったのですが、その資格を取ればずっとそのまま居られるかなと思ったのですけれども、そういう悪の道には入らず、10年間で異動しまして、いろいろなことをやりました。最初の9年間で文化事業を企画しました。市の立場で文化事業を企画するというのは、おそらくイメージができないのではないかと思います、それが私の原体験になりました。

そのあとは、役所のカルチャーと市民の方々の板挟み、というところかっこいいですけれども、悩みました。市役所のこともわかるし、市民の方の批判、意見もよくわかる。どうしようか、そうか研究の道がありそうだと思っている間に、1992年に「文化経済学会日本」、文化政策、文化経済、文化と社会を考える社会科学的な学会が立ち上がってきたということもあって、一方でこれをやりながら、役人と研究者の二足のわらじをはいていました。

ということで、役所ではいろいろな部署でいろいろな仕事をやりましたが、最後にやった卒業

制作として、先ほど佐々木先生からもご紹介があった横浜のクリエイティブシティの政策づくりを担当しました。1年間でいろいろな政策の元になるものをつくりましたが、その中のリーディングプロジェクトが「BankART」です。使われなくなった銀行の建物を活用したNPOによるアートプロジェクトですが、これを継続してずっとやってきて、そういうアートの活動をやること自体が目的というよりは、その結果として、地域に先ほど佐々木先生のお話にもあったように、創造的な企業ではなくて、創造的な人物、人が興味をもって関心をもってやって来る、あるいは移住する、今でいう交流人口、行ったり来たりもするという狙いをしました。

これが、私たちが想像する以上に大成功しまして、当時衰退がはじまっていた旧市街に関内というところがあるのですが、その空いているスペースがどんどん埋まっていったんですね。若いクリエイターや、クリエイターになりたい人、そういう人たちが集まってくると、ある種のエコロジーができてきて、暮らしやすくなってくるらしいのです。

地域がおもしろくなるということも経験しました。これは20年間続いています。そうすると、おもしろいんですね、市役所の職員が変わってくるのです。たくさんの方が創造都市の仕事を経験しましたから、そういう人たちで同窓会をやっています。4、50人軽く集まって、だからよく民間の方は役所では専門性のある人がいなくなって困るとおっしゃるけれども、少なくとも創造都市にはその心配はありません。いろいろな人が入れ替わり立ち代わり人事異動でローテーションで来ますから。

ということがありまして、やりきったかなということで、その後、鳥取大学で教員を16年間やりました。横浜に戻ってきて、今、横浜市立大学大学院の客員教授をやっています。

ということで、今日はこのお三方に来ていただいて、各都市、各地域の取り組み、そしてご自身の取り組みをご紹介いただき、それをネタにしながら文学都市、創造都市岡山をどういうふうに作り上げていこうかという話ができればいいと思います。

それでは、最初に北九州市立文学館の今川館長からよろしく願いいたします。

**今川** 今川でございます。今朝の新聞の一面のコラムにこんな記事が出ていました。岡山市出身の作家、内田百閒の『阿房列車』シリーズ15編のうち、所在不明だった直筆原稿2編が青森で見つかり、岡山市の吉備路文学館に寄贈された。これで全編が百閒の故郷に揃ったという記事が出ておりました。こういうことには、すぐに反応いたします。と申しますのは、先ほど図書館と文学館というお話が出ましたけれども、図書館と文学館では何が違うのかというと、図書館は図書を集めて、まずは貸し出すことが一番のお仕事だと思うのです。文学館は貸出しません。とにかく資料を収集して、収蔵して調査研究して、それを発信していくということで、資料はお見せすることはできますけれども、貴重ですから、それを貸し出したりはしないんですね。

北九州市は、1963年に5市が対等合併しましてから、昨年が60年でございます。まず、このまちの歴史をお話しておこうかと思います。というのは、結局そのまちの歴史を記憶として刻んでいくという仕事が、文学館の大きな役割だからです。もちろん、まちの人たちに文学作品を読んでほしいということもありますけれども、私なぞは、やはりまちの記憶としてこれは遺さなければいけないという思いで仕事をしています。

簡単に北九州市のことをお話します。九州の最北端のまちで、大陸に一番近い、もちろん本州にも近いところです。合併以前は小倉市は小笠原藩の城下町で、長崎街道の起点としても栄えたのですが、そのほかの門司市、八幡市、戸畑市、若松市は、漁村や農村でしかなかったのです。それが江戸末期から筑豊炭田で石炭が出炭いたしまして、それを運び出すということで、一挙に鉄道網が整備されていくのですが、鉄道で運ばれた石炭をさらに国の内外に運ぶことで、明治22（1889）年に門司港が海外輸出港として指定されます。



明治34（1901）年に官営八幡製鉄所が開業しますが、これによって、北九州は重工業都市として大きく発展していくことになります。50年後、半世紀で、8万人が昭和16年には80万人の人口を擁するようになります。ここで何が起きるかという、ある面では、いろいろな文化を背負った人々が集まってきて、長男ではない、次男三男が、あるいは女性も集まってきて、そこで文化の衝突が起きました。アイデンティティの衝突と言いますか、たぶん北九州という、あとでちょっと出てきますけれども、非常に住みやすい、食べ物もおいしいし、災害も少ないし、でもなにゆえか、あまり品がよくないというか、印象としてはよくないまちということになり、北九州はイメージアップにものごく力を入れます。そのイメージアップの一環として文化芸術に力を入れていくことになるのです。

四大工業地帯として発展いたしますけれども、公害問題も抱えます。まずその公害問題を克服し、今や環境都市として世界的にも評価されるまでになりました。

最初の市長は1期4年でしたけれども、その次の市長は5期20年です。その次の市長も5期20年で、その次の市長は4期16年です。そして昨年、今の市長になりました。ということは、歴代の市長が長期政権であったために、長期計画をつくりやすく、実践できたということです。それで、5ヵ年計画、10ヵ年計画というものをつくっていきます。

それによって、全国で6番目、九州で初めての100万人都市になったときに、その100万人都市にふさわしい文化施設をつくらなくてはいけないということで、たとえば美術館は、磯崎新さんの作品ですけれども、当時としては西日本一でした。それから歴史博物館、自然史博物館と、さまざまな文化施設がつけられていきます。

そのうちに第一次オイルショックが起き、そして経済構造が変わっていく中で、最初の長期計画は難しくなり作り直します。最初の市長は1期4年でしたけれども、その次の谷伍平市長が文化施設をつくり、それからその次の国交省出身の末吉興一市長が、財成が厳しくなった中で施策を練ります。ここでおもしろい記事があるのですが、現在の日本政策投資銀行ができた際の全国11大都市の住みやすさアンケートにおいて、北九州市は生活実態の住みやすさは第1位だったのですけれども、イメージ調査ではワースト1位だったのです。それで、末吉市長は、都市経営にとっては都市イメージを上げていくことが非常に大事だということに注目するわけです。そして前の谷伍平市長も、低成長の時代となり福利厚生の方にシフトを変えていきましたが、末吉市長のときに、さらに芸術文化振興の施策が都市経営の時代には重要ということになり、その方向でやっていくことになります。

末吉市長は中央からお金をとってくることに尽力し、中心市街地活性化事業やあるいは多様な



補助金、交付税措置を受けて、岡山は昨年素晴らしい芸術劇場ができたと同っておりますけれど、その時代にいち早く芸術劇場ができますし、美術館の分館や北九州自然史・歴史博物館、それからひびきホール、松本清張記念館、そして私どもの文学館もこのときにできたわけです。

その次の北橋政権は16年続きます。まだ暴力のまちというイメージの払拭には至らず、文化のまちという都市イメージの向上にはつながっていないとして、もっともっと市民のシビックプライド、つまり街の格というのでしょうか、シビックプライドの醸成に力を傾けることになりました。ハード面はお金を使えなくなりましたから、ソフト面での施策への取組みを重ねました。

先ほど、佐々木先生から少し紹介がございましたけれども、東アジア文化都市にも挑戦いたしました。東アジア文化都市というのは、日本、中国、韓国のそれぞれの文化大臣の会合で決まった、いわゆる文化交流事業です。1年毎に中国、韓国からそれぞれの都市、丁度コロナ禍の時期だったものですから、日本は北九州市が2年間やりました。本来はそれぞれの都市が訪問し合いながらの日中韓文化交流でしたが、コロナ禍のためにそれぞれへの渡航が難しく寂しい東アジア文化都市事業になりました。

ここから文学館の話に入っていきたいと思います。文学館の始まりは1967年に開館した日本近代文学館です。博物館の一つではありますが、歴史が浅く博物館法にも名前がないくらいです。「それってなあに」と言われます。要は、文学資料の散逸に危機感をもった作家や研究者が、今、源氏物語が評判になっていますが、明治以前のは文化財の指定を受けやすく、近代以降のものは、なかなか文化財にはなりません。けれども、作家たちや研究者は、そういう資料の散逸を危ぶんで文学館というものをつくっていきます。日本近代文学館は全国区ですけれども、ちょうどバブルとぎりぎり重なり、地方にも幾つも文学館ができます。地方の文学館の役目は、地域固有の歴史、風土、文化に育まれた文化遺産を再発見することでもあります。

北九州市は先ほど、私は周辺からいろいろな文化を背負った人たちが集まったと申しましたけれども、非常に作家の輩出が多いまちです。かつては火野葦平、あるいは「無法松の一生」の岩下俊作がおり、同人誌活動が盛んでしたが、今は、もっとたくさんのゆかりの作家がいます。例えば芥川賞ですと、平野啓一郎さん、村田喜代子さんがいらっしゃいますし、直木賞も佐木隆三さんや葉室麟さんもそうですし、時代小説の佐伯泰英さん、映画監督も多いですよ。平山秀幸さん、亡くなられた青山真治さん。児童文学作家も多いです。なぜそうなのかということを考えながら、掘り起こしていく。そういう全国的に注目される作家たちを輩出するのはなぜかということ、その底辺には、やはりその地域で歴史的にそれなりの文学活動が活発に行われていたということがあります。

官営八幡製鉄所はもちろん大企業です。JR九州も、当時、門司鉄道管理局として、門司にありました。つまり大手企業の恵まれた労働環境がありましたから、優れた労働者が集まります。すると、彼らは自己表現の一つとして、文学、あるいは美術もそうだったと思いますし、音楽もそうでしたが、文化芸術を求めるようになりました。そして会社が福利厚生の一環として職場雑誌をつくり、その中に文学欄を設けます。そこに投稿した人々が、今度は自分たちで、同人誌をつ





くり、同人誌活動が非常に盛んになっていきました。そういう環境の中から、作家たちが生まれていきます。文学館の展示では、全国に向けて発信する作家たちと、それからジャンルごとに、わたしどものまちで、それがどういうふう生まれ発展していったか、という歴史を展示しています。

企画展なども開催いたしますが、このたびは児童文学者の長野ヒデ子さんは、福岡にも北九州にもご縁がありましたので、長野ヒデ子展のオープニングにお出でいただきました。

そして文学館では、今、大きな賞として「林芙美子文学賞」「子どもノンフィクション文学賞」「あなたにあいたくて生まれてきた詩コンクール」を行っています。それ以前は平成 25 (2013) 年まで「北九州市自分史文学賞」を 24 回実施し、役目を果たしたということで、平成 26 (2014) 年から北九州で生まれた林芙美子を顕彰して、「林芙美子文学賞」を新人発掘の文学賞として実施しています。選考委員に井上荒野さん、角田光代さん、川上三映子さんという、今、最も旬で書



いている作家の方々に選考していただいています。第 2 回の大賞を受賞した高山羽根子さんが芥川賞を取りました。それから第 7 回に受賞した朝比奈秋さんが去年、三島由紀夫賞、泉鏡花賞に野間文芸新人賞を受賞しました。まだ、10 回目ですけれども、ここから出た作家の方たちが、林芙美子文学賞でデビューしたと書いてくださることで、北九州市を発信できているということです。

また「子どもノンフィクション文学賞」は、ぜひ読んでいただきたいのですが、子どもが自分で体験したり、あるいは調べたりしたこと、調査したことを書いています。その中には、いじめの問題であったり、最近では発達障害のことであったりなど、時代を反映する作品も見受けられます。来年度で 16 回になりますが、たとえばこれらの作品の中から絵本になって、大手出版社から出版されたり、あるいは、その文章を書いた本人の生き方が非常に胸を打つということで、ドキュメンタリーとしてテレビで放映されたりというようなこともあり、この文学賞も本当にやってよかったなあと思っています。

そして東アジア文化都市では、北九州ゆかりの作家の文学作品を原作とした映画もたくさんあることからまちの小さな映画館、先般火事になりましたが、再建されております。そこで中学、高校生は無料で映画を観られる上映会をやったり、後でまたお話いたしますが、現代舞踊と詩のコラボレーション、あるいは書と文藝などの展覧会などを開催いたしました。

そのほか、漫画やフィルム・コミッションの活動などもありますので、それはまた後程紹介させていただきます。

**野田** ありがとうございます。お一人 15 分間の割り当て時間があるのですが、北九州には 15 分では語り切れないくらいの資源があるということですね。また、後程、補足があればお願いいたします。

引き続き、今度は場所が変わりまして、豊岡市の城崎から、田口幹也さんにお出でいただいて

います。田口さんは多彩な活動をされているのですが、直近では、平田オリザさんと一緒に豊岡演劇祭に関わっておられます。それから芸術文化観光専門職大学ができましたよね。そんなことも含めてお話をお願いします。コウノトリの話に触れていただいても結構です。今日は本の話なので、ぜひ、「本と温泉」との関わりについても一つポイントを置いてお話いただければと思います。

**田口** 兵庫県の北の方、山陰地方から来ました田口と申します。よろしくお願いたします。

今日は、豊岡市で僕が関わってきた、主に二つの活動について紹介させていただければと思います。

一つは、今、野田先生からお話がありました「本と温泉」という活動です。こちらは民間の活動です。NPO 法人 本と温泉を 2012年に立ち上げてやってきた活動です。それからもう一つが、城崎国際アートセンター、これは舞台芸術に特化したアーティスト・イン・レジデンスです。こちらは民間ではなくて、行政、市の事業です。この二つについて、簡単にご紹介させていただきます。



この二つの活動は、両方とも文学、文化、アート、そういったものに基づいているのですが、若干活動の領域というか、レイヤーが違うと思いましたので、ちょっと整理しました。

どちらかというと、「本と温泉」というのは、城崎という地域の町おこし、もう少し言うてしまうと、文学の町としてのリ・ブランディングですね。城崎国際アートセンターは、市がやっていますので、どちらかというと、市全体のまちづくり、城崎温泉は豊岡市にありますので、その町のまちづくりで、どういうことかということ、芸術文化による地方創生ということになります。

文学によるまちづくりを行っている岡山ということで、まず、本と温泉の活動から紹介させていただきます。

城崎温泉に行ったことがあるという方はいらっしゃいますか？結構、いらっしゃいますね。ありがとうございます。ご存じの方もいらっしゃるかもしれませんが、城崎温泉は、町全体が一つの旅館という見立てで作られています。駅が玄関、道路が廊下、七湯めぐりが有名なのですが、七つある外湯がいわゆる大浴場、そして今 70 軒ほどある旅館がいわゆる個室、旅館のお部屋であるという見立てです。

1300 年続く温泉街で、木造 3 階建ての街並みというのが特徴なのですが、ミシュランのグリーンガイドで 2 つ星を取っています。最近ですと、その風情にひかれて外国人の方が、非常に多く観光客として訪れるようになりました。ゆかたの似合う町、いで湯の町、それから歴史と文学の町というふうに言っております。

城崎温泉 = まち全体が一つの旅館



ゆかたの似合う町というのは、基本的に皆さんチェックインされますと、外湯に入るためにゆかたを着て、そぞろ歩きをされる。7つの外湯があるいで湯のまちです。

文学の町というのはなぜかという、基本的には志賀直哉先生が、たまたまこの地に 100 年前にいらしたからなのですね。1912 年の 10 月に初めて城崎を訪問されました。『城の崎にて』を読まれた方はご存じだと思いますけれども、山の手線に轢かれて、その療養のために城崎温泉にいらしたのが最初です。ちなみにこの作品が書かれた 1912 年のころは、志賀直哉さんはまだいわゆる一介の書生でした。特に有名な方でもなかったのですけれども、当時パンなんてないこの町に来て、朝ごはんにパンが食べたいといって地域のお菓子屋さんにパンを焼かせたりされていたそうです。非常にお金持ちの息子さんだったのですね。その後、その経験を踏まえて 1917 年に『城の崎にて』を発表されます。

こういうご縁があったので、城崎は文学の町というふうに、一応 HP 等では言っていたのですが、果たしてそうなのだろうか、というのが城崎に住む人たちの基本的な疑問でした。観光客などに城崎の印象はどうかと聞くと、温泉の町、外湯の町ということもあるのですけれども、たいいてい皆さん「カニ」というのですね。11 月から 3 月まで、松葉ガニが近くの津居山港で獲れます。基本的には、このカニを目指して、岡山からですと、姫路で特急「はまかぜ」に乗り換えて「カニカニエクスプレス」という電車に乗ってやってきますね。カニをたらふく食べて帰るのが基本的な城崎のイメージです。

11 月から 3 月までは、そういう感じでにぎわうのですけれども、残念ながらそれ以外の季節はカニが獲れないのです。それからカニというのは、僕はこのまちの出身ですけれども、ずっと東京におりまして、残念ながら東京の人たちというのは、カニのことを考えて生きていないのですね。大阪の方々は、たいいてい皆さんカニのことをちょっと思い出してくださるのですよ。10 月くらいになると、そろそろカニ食べたいな、城崎行こうかというような話になるのですけれども、残念ながらカニのリーチというのは、関西までしか届きません。

関西が元気なうちはいいのですけれども、やっぱり関西も最近は元気がない。去年阪神が優勝したので、若干元気になりましたけれども、たぶんそんなに長くは続かないと思うのですね。これからは、全国からお客さんに来てほしい。その時にこれをもう一回活用しようではないかというのが、「本と温泉」の始まりです。『城の崎にて』という志賀直哉の 100 年前の小説をもう一度活用して「文学の町」というアピールをしようというわけです。文学、芸術というのは、カニほどマスには届かないけれども、おそらくリーチというのは長いだろう。好きな人にはささる。これでやっていこうというふうにして取り組みました。要は「文学の町」としてリ・ブランディングしていこうということですね。

その時に、ここに雑誌がありますけれども、城崎というのは、るるぶやじゃらんなどといった旅行誌にはたくさん特集されます。安くてカニが食べられるお宿 10 軒、なんていうのは、本当に毎年掲載されます。だけれども、そういう人たちではなくて、もう少し、ライフスタイル系の人たち、そういう人たちに届けていこうと、文学の町を目指すから文芸誌というアイデアもあったのですけれども、それではなくて、どちらかというライフスタイル、そういうものをターゲットにしようということになりました。ちょうど僕が豊岡市の観光の PR のアドバイザーをしていて、雑誌を使ったマーケティングをずっとやっていたのですね。そのときの雑誌は何かというと、カルチュア誌ですが、こういうものには「城崎」は、ほとんど掲載されてこなかったのです。でも、そういう雑誌をターゲットにしていこうということで「本と温泉」プロジェクトが始まりました。NPO 法人 本と温泉は、城崎の旅館の経営者たちを中心にしてつくられた NPO 法人で、

2012年に立ち上がります。

どういうコンセプトでやっていくのか、一つは当然観光業です。城崎温泉でしか買えない本にしよう、この本を買うためにわざわざ来てもらおうということを目指しました。それからただ単に本を出すだけだと、残念ながら志賀直哉の『城の崎にて』は教科書にも載っています。全国の本屋さんに行っても買える。それだけでは商品性がないので、きちんとお土産でも喜んでもらえるようなデザイン性をもたせよう。それから当然読むとまた来たくなる、もしくはお土産でもらった人が読むと、このまちに行きたいなと思ってもらえるような、そんな本にしていこうと考えました。



それだけでは商品性がないので、きちんとお土産でも喜んでもらえるようなデザイン性をもたせよう。それから当然読むとまた来たくなる、もしくはお土産でもらった人が読むと、このまちに行きたいなと思ってもらえるような、そんな本にしていこうと考えました。

とりあえずサンプルを持ってきております。第1弾は当然志賀直哉に敬意を表して、『城の崎にて』です。ただ、これは非常に短い作品で、これだけでは商品にならないので、注釈をつけております。本文16ページに対して、確か96ページくらい注釈があります。こちらの方がだんぜん多いのですよ。こういう浴衣の中にも入れられるような、“映え本”としてつくりました。

それから今後は、やっぱり志賀直哉におんぶに抱っこではいけないだろうということで、現代の作家を入れていきます。第2弾は万城目学（まきめまなぶ）さんです。関西で各町をモチーフにした小説を書かれていたのですが、なぜか兵庫県のことは書いていらっしやなかったのですね。これはチャンスだということで、万城目さんに書きおろしをお願いしました。こちらは通称「タオル本」と呼ばれていますが書きおろし小説『城崎裁判』です。

万城目さんが書いたということを知った湊かなえさんから、実は湊さんは、以前淡路に住んでいらっしやいまして、毎年、城崎に来ているということで、なんであなたが書いているの、本来なら私が書くべきではないかというクレームが、冗談っぽく来たそうなのです。そのクレームが若旦那のもとに届きまして、“どんな話になってもいいから”書いてもらおうということになって、書いてもらったのが『城崎にかえる』という小説です。これは通称カニ本と言われています。

最後が、子育て世代が増えてきたということで、絵本にしようということになりました。文学と温泉にせずに「本と温泉」にしたところは、こういった本を出せるということですね。日本でおそらく一番絵本を売っているだろうというユニットに、城崎の風景をもとにした『ユノマトペ』、オノマトペをもじった言葉ですが、これを書いていただきました。

これは、若旦那が進めたものなのですが、城崎のまちに新しい効果というか、つながりを生み出しました。基本的には、若旦那が作りましたが、売るのは旅館ではなくて、お土産物屋さんや、最近ですと、飲食店などでも売っていただいています。要は、一つの旅館として営業している城崎温泉なので、それぞれの役割でやっていこうということです。城崎は小さなまちですし、それからお祭りもあるので、基本的にみんな仲はよいのですけれども、旅館の人とお土産物さんが一緒にビジネスをするということはなかったのです。だけれども、これに関してはお土産物屋さんで在庫がなくなると、20部『城の崎にて』を持ってきてという感じで売ってくださる。そこでコミュニケーションが生まれて、それから自分たちで本をつくって売っているという実感を皆さんが持っていただけるようになる。先ほど、シビックプライドなんていう話もありましたけ

れども、そういう意味で城崎の方々に自分たちは、自分たちの本をつくって売っているというプライド、そういったものが住民を含めて醸成できてきたのではないかと思います。

実は、当初はどこにも取り扱ってもらえなかったのです。この第1弾は1000部、第2弾の万城目学さんの小説も1000部刷ったのですが、高いと言われました。万城目学さんの本の価格は1700円でしたが、「お前ら城崎のお土産の単価を知っているのか」と言われ、1700円なんて買うわけがない、だれや「マンジョウメガク」って、というようなことを言われました。それがメディアですごく取り上げられて、お土産物屋さんに、すごく問い合わせがきたのです。1000部はあっという間に売り切れました。1か月ぐらいで売り切れました。増版に増版を重ね、現在まで、城崎でしか売っていませんが、この4冊で7万4000部刷っております。万城目さんにも、年末にちょっとお会いしたのですけれども、正直、こんなに売れるとは思わなかったとおっしゃっていただきました。

今、なかなか文学、文芸それからエンターテインメントを含めて、本が売れない時代なのですが、こちらに関しては、おかげ様で非常に売れております。

城崎というのは、基本的に共存共栄というふうに、よく町の人はいいます。要は、自分たち一人で儲けるのではなくて、町全体で儲けて、みんなが存在できるようなことにしようと、そういうことにも、この「本と温泉」は貢献できたのではないかと思います。

先ほど、雑誌を使ったマーケティングと申しましたけれども、おかげさまで本当にさまざまなメディアに取り上げていただきました。最新ですと、婦人画報に掲載されました。実は、この「本と温泉」をやって、一番恩恵を受けたのは三木屋という旅館です。なぜかというと、志賀直哉が100年前にやってきたときに、この旅館に泊まったのです。この「本と温泉」がメディアで紹介される際には、必ず三木屋とセットで紹介されます。そうしないと、「本と温泉」の意味がなかなか読者に通じないからです。

2011年、12年ぐらいの城崎の旅館に泊まる東京のお客さんというのは、大体10%未満、7~8%ぐらいでした。だけれども、三木屋さんはこの活動を始めてから、なんと30%ぐらいが東京からのお客さんになったのです。あっという間にリーチが関東圏まで広がって行って、そしてこの宿に泊まりたいと、わざわざいらっしゃる方が増えてきた。ちょうど、三木屋さんが2013年にリニューアルをされたということもあって、例えばデザインに特化した館内施設、もしくは今までの旅館ではないようなしつらえを持つ、図書館ではないですけれども、本がたくさん置いてあるライブラリーの設置。こういうやり方をすると、これまでとは違う客層を呼べるなということが、城崎の人たちにもわかってきました。これがまた次の流れをもってきます。

2023年、去年が「本と温泉」の10周年でした。正確には11周年ですけれども、この10周年を記念して、今、二つ事業をやっております。一つは英語版の『城の崎にて』を出そうということ、それからもう一つが「建築と温泉」というイベントを去年の7月に開催しました。

まず、英語版の『城の崎にて』。これは単純に『城の崎にて』を英語版にして売り出そうというものです。ただ、残念ながら『城の崎にて』を書かれた志賀直哉先生は、海外の方にあまり知られていないのです。そうも言われていません。すでに『城の崎にて』の英訳というのは出ておりますけれども、どうもあまりいい訳ではないようです。だいぶ前に書かれましたので、古いということもあるというわけで、新しくテッド・グーセンさんという村上春樹さんや、川上未映子さんの小説を翻訳されているカナダの翻訳者の方に新たに翻訳していただきました。そして川



内倫子さんという非常に人気のある、世界的に活躍されている写真家の方に城崎で写真を撮り下ろしてもらって、この二つで『城の崎にて』の世界観を日本人ではない方にもわかっていただく、そんな本を今、出版しようと準備しております。おそらく2月の中旬に完成する予定です。

城崎は、2011年には1000人弱だった外国人のお客さんが、2019年には5万人になりました。コロナを経てコロナ期間中は当然海外の方はいらっしゃらなかったのですが、今年はまだ、正確な数字は出ておりませんが、2019年よりもはるかに予約が入っていると聞いております。そういうこともあって、『城の崎にて』の世界、日本人の死生観を表す作品と言われますが、そういったものを海外の方にも感じてもらえる、そういうものをつくろうと思っています。

それからもう一つが「建築と温泉」です。これは先ほど言いました通り、三木屋さんがリニューアルしたら東京からたくさんのお客さんが来たということもあって、自分たちの宿をかなり新しい建築家と組んで、リニューアルする動きがあります。

岡山で広島のことを言うのは、あまりよくないと言われてきましたが、たとえ

ば尾道にあるU2をつくったサポーズデザインや、瀬戸内の船の上に浮かぶ旅館として有名な「ガンツウ」をつくられた堀部安嗣さんの宿などが、実は城崎にもあるのです。そういった宿8軒の建築家と若旦那たちがトークするイベントを開催しました。「本と温泉」ですので、その内容を本にして無料配布するというのも10周年の記念事業として行っております。こんな感じで、文学のまち「城崎」を、本というものを通じて新たなお客さんにリーチする活動を今も続けております。これが「本と温泉」の活動です。

それからもう一つ、「城崎国際アートセンター」ですが、芸術文化による地方創生に豊岡市は取り組んでおります。地方創生は人口減少対策なのですね。豊岡でも、御多分に漏れず、若い人たちがいなくなっています。なぜか若い人たちに選ばれていない。なぜ若者に選ばれないかという、やはり保守的でなかなか息苦しいから。だから新しく身に着けた知識やスキルを活かせない。先ほど、野田先生からコウノトリの住めるまちというふうに言われましたけれども、豊岡市はコウノトリの野生復帰に取り組んでできました。それを称して「コウノトリも住めるまち」と言っています。これに加えて、「アーティストも住めるまち」ということを2015年くらいから言い出しました。

「コウノトリが住めるまち」というのは、どういうまちかということ、生物多様性がある豊かな自然環境があるまちのことです。コウノトリをその象徴として言ったのです。コウノトリというのは100%肉食の鳥で、1973年に日本から一度絶滅しました。なぜ絶滅したかということ、日本の農業が変わったからです。ありていに言うと、農薬を使って効率的な農業をするようになったから。そうではなくて、生物がいっぱい居る自然環境、昔ながらの農薬を使わない農法にすることによって、コウノトリをもう一度復活させました。こういう環境は、子供たち、人間にも当然いいよねということから、豊岡市はコウノトリの住めるまちを目指しました。

では「アーティストの住めるまち」は何かということ、これは文化的価値の多様性がある豊かな



社会であろうと思います。若い人たちがなぜいないかというと、そういうものが地方から失われてしまったから。大らかな時代ではなくなってしまったから。でもアートの方や文学の力を借りて、こういったものをもう一度取り戻そうと、そうすることによって人々が挑戦する、これができるまちにしていこうというのが、基本的な地方創生、文化芸術による地方創生の考え方です。その副産物として、大学や演劇祭、そういうものが豊岡市で行われるようになってきました。



最後に、簡単にまとめてみると、基本的に町おこしはアプリのようなものかと考えています。まちづくりというのは、そうではなくて、OSをつくるようなことなのだろうかと、要はコンピューターの基本的な動作をするところ、ここの部分に文化による取り組みというものがついてくるのではないかと考えています。

「地域を耕す」、本当にありていですが、それでも、「カルティベートすること」ですね。こういうことをすることによって、まちというのは元気になり、多様性が生まれ、そして経済が回っていくのではないかと考えています。以上です。

**野田** ありがとうございます。本当はまだまだこの背後には、ものすごいストーリーがあるのでないかと思いますが、それを探っていくと、この時間では終わりません。

今日の主役であります岡山市からは、山川さんに来ていただいています。このような話を踏まえて、岡山市は今回、ユネスコの創造都市に加盟したのですが、その原動力や、これから未来に向かって岡山がどういうふうに取り組んで、創造都市岡山を構築していくのかという方向につなげていきたいのですが、まずはその前にどういう活動をされてこられたのか、それがどうつながったのかということを知りたいと思います。

では山川さん、お願いします。

**山川** 皆さんこんにちは。「吉備人（きびじん）」出版とご紹介いただいたのですが「きびと」と読みます。どちらでも構いません。

僕は1955年に岡山市で生まれて、吉備人出版という地方出版社を1995年に設立しました。今年の春から30年目に入ります。今まで830タイトルの岡山をテーマにした本をつくって、印刷した部数を数えてみると、約127万冊ありました。これは決して売れた冊数ではありません。

2022年に、岡山市の文学創造都市岡山市に「文学によるまちづくり部会」が発足したときに、そのメンバーとして加わって大森市長に提言書を渡すところからスタートしたのが、この活動の始まりです。

僕はひたすら 30 年間地元の本をつくってきたので、行政の方と一緒に何か公的な仕事をするという機会がなく、今までつくった本の中で岡山商工会議所とも関連が深いのは、「晴れの国おかやま検定」という本です。実は岡山商工会議所が岡山検定を始めた時からかかわっていて、この教科書づくりをやっています。

ユネスコ創造都市の加盟までの経緯をということだったのですが、僕は古いことは知りません。聞いたところによると、2014 年ごろ市議会で ESD に関する世界会議があって、その関連で議員の方からユネスコの創造都市ネットワークへの加盟はどうかというような質問が出て、岡山市においてユネスコ創造都市ネットワークについて検討を始めたと言っています。

当初は、大森市長にも確認したところ、特に文学でというような気はなかったということでしたから、何でもよかったのだらうと思います。ただ、そういう中でも文学がテーマになった背景というのは、いろいろ探してみるとあったのかなと思います。先ほどからお話がありますように、坪田譲治文学賞、坪田譲治というのは、大正から昭和の初期、それから戦後も含めて日本の児童文学を代表する一人でありましたし、意外と知られていないのは、中国でもたくさん翻訳が出ていて、海外にも影響を与えた児童文学者だったということです。

それから先ほどの北九州の話を知ると、北九州出身の作家が多いということですが、岡山からもたくさんの作家が出ています。有名どころでは随筆家の内田百閒が岡山市の生まれですし、小川洋子さん、重松清さんというような方も岡山市を代表する作家だと思います。

2022 年 3 月に、先ほども出ましたけれども、坪田譲治の研究をされているノートルダム清心女子大学の山根先生を中心に、文学によるまちづくり部会の設置があり、提言を市長に手渡して、23 年度から具体的な集まりができました。この部会というのは、僕も初めて参加してみたのですが、たとえば図書館関係の方、大学の先生ももちろんですが、商工会議所の方、観光分野の方、それから書店の業界の方、古書店を営んでいる人、そういういろいろな分野の本に関わる、文学というよりは本に関わる人たちが集まって、岡山を文学のまちにしようという取り組みを始めたわけです。

では、申請するにあたって岡山が文学のまちであることをどうアピールしていくかということで、参加メンバーにどんなことをやったらいいかという意見をとりまとめた行ったものの一つが、「おかやま文学フェスティバル 2023」というイベントです。ブックイベントというのは、いくつかやってはきていたのですが、これほど大掛かりなブックイベントというのは 2023 が初めてでした。昨年の今頃、2023 年の 2 月から 3 月にかけて、平松洋子さんと呼んで行った記念講演を皮切りに、「一箱古本市」を行いました。表町ブックストリートという商店街に一





箱古本市を並べて、道行く人たちと会話をしながら本を売るというものです。それからおかやま文芸小学校という、県外から来た方はご存じないでしょうけれど、旧内山下小学校が町の真ん中、岡山市の市民会館の向かいにあるのですけれども、この明治にできた古い学校を会場に、全国といっても九州、沖縄、大阪、東京から出版社や、古書店、書店さん呼んでブックフェアを開催し、2日間で約6000人強の集客がありました。文芸小学校は大変楽しかったという記憶がありますが、それから派生して岡山市の真ん中を走る表町商店街の空き店舗を利用して、シェア型書店ができるというのも一つの文芸フェスティバルの成果だったと思います。

そんなフェスティバルが実現した背景には、ブックイベントや、定期的にシンフォニービルでやっていた古本市のようなものがありました。もう一つは、岡山は文学賞を実施してはいますが、隣の倉敷市も岡山県もいろいろな文学関係の公募や作品集を出しているということもあ

ります。岡山県は「岡山の文学」を毎年1回出しています。倉敷市は「倉敷市民文学賞」を実施しています。岡山市は「おかやましみんのどうわ」という冊子も出しています。実はこの「しみんのどうわ」の発行については、僕は非常に苦い思いがあります。「しみんのどうわ」を制作して発行していただけた本を、2006年くらいに一般の人にも読ませたいということで、そのリニューアルと頒布のための出版社として手を挙げて、「しみんのどうわ」が市販されて書店で買えるような仕組みを、岡山市の文化振興課とつくったのです。3年か、4年くらいつくらせていただいたのですが、それ以降は入札になって、結果、レールを敷いただけということになってしまいました。

先ほど北九州市はノンフィクション賞とおっしゃっていましたが、吉備路文学館が少年少女の詩という詩集を長年出していて、これも今、うちで出版をしているところです。岡山県の岡山文学も「少年少女の詩集」もうちで出しています。

もう一つ、出版活動も充実していることをこの機会にぜひお伝えしておきたい。日本文教出版という出版社があって、『岡山文庫』という小さな文庫本で岡山の百科事典のようなものを出している会社があります。それから福武書店、今、ベネッセ・ホールディングスという社名になっていますけれども、まだ福武書店と言っていたころに、文芸誌「海燕」という雑誌をつくっていました。新しい文芸誌のジャンルに、しっかり挑戦していた出版社もあったわけです。

地元山陽新聞の出版局というのは、ぼくは元々、地方紙の出身だったのですけれども、ここは本当に旺盛な出版活動をしており、大体70年代から80年代にかけての地方紙における出版部門としては特筆すべき冊数と内容を誇っていて、特に「岡山県大百科事典」は1冊2万円くらいでしたが、4万部売れました。岡山文庫もそうですし、山陽新聞の出版部の大百科事典を執筆する



盛んな出版活動

- 日本文教出版『岡山文庫』
  - さまざまな分野の書き手の育成
- 福武書店（現在のベネッセホールディングス）
  - 文芸誌「海燕」
- 山陽新聞出版局
  - 岡山県大百科事典
- 手帖舎
  - 詩・短歌・俳句・随筆など文芸の書き手を育成

人材を育てていったこの二つの出版社の成果といえますか、書き手を育てるという意味では、岡山文庫と山陽新聞の出版部はすごかったのだらうと思います。併せて「手帖舎」という、地方でありながら文芸誌専門の詩・短歌・俳句、そういったものを出し続けていた出版社もありました。そういった形で吉備人出版以外にも特徴的な出版社があり、やはり出版活動が盛んだっただらうと思います。

ユネスコ創造都市ネットワークへの加盟申請に向けた活動の一つとして「おかやま文学フェスティバル」をやってきました。これが今年、2024年も開催を予定しています。その文学フェスティバルの中で、表町ブックストリート、商店街を使った一箱古本市、それから文芸小学校という廃校を使ったイベントを開催し、本当にわずか半年くらいの間に、よくこれだけ多くのプログラムができたと思うくらい、いろいろな人が集まってきて、楽しく二日間を過ごすことができました。

新聞などにも紹介されて、なんとなく市民の中に岡山が文学のまちだというイメージが、こういうイベント通じてできたのではないかというぐらいに思っています。問題はこれからですけど、それは今後の議論の中で話をしていくということにしたいと思います。



**野田** ありがとうございます。ハンズオンというか、手作り感が満載ですし、おそらく行政が入っちゃうと、人が変わったり予算が切られたりしますが、市民の活動は細々でも続いていくという形になると思いますので、こういう形で立ち上げたのは、ある種理想的なのかなと思います。

ただ、だから民間がやっている方がいいのではないかと、役所は必要な援助を行なうような、そういう公共との関係ができるといいと思います。でもあくまで、市民の姿が見えているのが理想だと思います。

では、これからディスカッションの時間に入ります。30分ぐらいありますので、まず、どうでしょう、質問など、これはどうなったのですかということが、それぞれの発表の中であればお尋ねいただいて、なければご意見をいただくことにしたいと思います。何かありますか？

**今川** 先ほどは文学館の活動だけを申し上げたのですが、佐々木先生からエディンバラのフェスティバルのご紹介がございましたので、参考になればと思ひまして、北九州のメディア芸術分野のお話を加えたいと思います。

メディアというと、アニメだったり映画だったりしますが、そこにも力を入れておりまして、2018年から22年まで、文化庁の国際的なメディア芸術発信拠点の形成事業に採択されて、ポップカルチャーフェスティバルや、アニメソングピアノライブ、アジア MANGA サミット北九州大会、これは漫画関係者



による国際会議ですが、こういうものもやっております。

北九州国際漫画大賞を 2016 年度から毎年実施しておりまして、東アジアの方が中心に応募されています。

それからフィルム・コミッション、映画やドラマなどの映像作品の撮影が円滑に行われるための支援を行う組織ですね。北九州市は 1989 年から撮影の誘致や、支援の取り組みをやってきました。2000 年に北九州フィルム・コミッションを市役所の文化振興課の中につくりまして、これは日本で最初の行政の中にあるフィルム・コミッションとなりました。撮影実績は現在まで 700 本を超えておりまして、エキストラ登録者数は 9000 人です。ただ、北九州で撮影していますよとは出ないのですね。映画の最後のところに「協力 北九州フィルム・コミッション」と出ますけれども。例えば映画「図書館戦争」では、市立美術館や図書館がロケの舞台になっていますので、聖地みたいに見学にいらっしゃる映画ファンの方が結構います。

先ほど、いみじくも申し上げましたけれども、こういう活動はやっぱり文学が結構影響しているとか、原点なんですね。そういうところで、文化芸術の振興につながる大規模な協力体制を作りたいと願っています。以上、ご紹介させていただきました。

**野田** ありがとうございます。それでは、これで発表が一巡したので、今の発表をお聞きになって、アドバイスではないけれど、こういうことがあるのではないかと、アイデアなどがありますか？あるいは弱点としてこういうことが挙げられるのではないかと、ということがあればお願いします。それでは田口さんからどうぞ。

**田口** 先ほどちょっと山川さんとお話させていただいたのですが、文学フェスを、本当に地域で、いわゆるホールなどといったところでやるのではなく、街中で実際にやっていたらいいところがすごく素敵だなと思いました。演劇祭を豊岡市はやってますが、通常演劇というのは基本的にはブラックボックス、ホールや劇場でやるものなのですね。



けれども、豊岡演劇祭の場合は、フリンジ型、一般参加とよく言われますが、フリンジ型の演劇祭を目指しておりまして、いわゆる劇場というのではなく、街角であったり、キャンプ場であったり、豊岡には海もありますので、海岸であったり、そういったところでパフォーマンスをするのですね。それから城崎の温泉街ですと、大道芸を週末にやっていますが、そういうふうに街に出ていくことによって参加して下さる方というのが、がぜん増えていくし、町の風景が変わっていくというところもあります。なので、いわゆるそういった施設の中だけでなく、外でいろいろな人、たまたまそこに居合わせた人が参加できるというのは、本当にすそ野を広げていく上でもものすごく有効なのではないかと思えます。

あと、豊岡は「弁当忘れても傘忘れるな」と言われるくらい雨が多いのですが、こちらは晴れの国で本当にうらやましいなと思っています。私たち、外で行うイベントを企画しても、大体雨

で流されてしまうので、本当に岡山は恵まれていると思っています。

**今川** 私が田口さん、山川さんのお話を伺ってとてもうらやましいと思うのは、民間が頑張っていることです。北九州市はどちらかというと行政主導型なのです。それはなぜかという、もともと大企業があって、その福利厚生として従業員の方たちに文化芸術を提供するということがありました。つまりチケットは現在は皆さんが買ってくださいなのですが、かつては会社から福利厚生の一環として無料で享受できたので、国内外のトップレベルのアーティストの公演でも自分でチケットを買わなくても愉しめたわけです。

それから北九州市には、出版社が一つもないのです。なので山川さんのお話を聞いて、うらやましいというか、福武書店ができて「海燕」ができたときもすごいなと思ったのですが、山川さんが地元で出版していくということは、それこそ文化だと思います。そういう意味で、わたくしは民間の方が自分たちの力で継続的にやっていくということは、まち全体で大切にしていかなければいけないことで、それこそがそのまちの文化の厚みだと思います。

私の場合、一研究者でしかなかったのですが、文学館設立に携わり、そして文化振興担当理事に行政の一員としてかかわってきましたが、本来は民間の方が活力をつけて文化芸術を育むスタイルが、最も大事だと考えています。うらやましいです。

**山川** ありがとうございます。民間ががんばらないと。でも、先ほどの文学館の役割がまちの記憶を記録していくというお話は、僕は実は地元で本をつくっているのは、まさにそういう思いでやっています。今、同時代に私たちが生きていることをできるだけ本という形にしていけば、残していけるということがあって、そういう意識というか、今の岡山の私たちの生活を形にして残していくには、本が一番だと思いました。

それから田口さんのお話の中で、総合的にというか、実はこの活動、文学によるまちづくり部会のことを、知り合いや周りの人たちに話をすると、「なんで岡山が文学なの」と、本当に10人が10人から言われます。「いや実はこうなんだよ」という話をするのですけれど、それでも岡山と文学はイコールにならないのです。この1年間は、それを一つひとつ解きほぐしていく1年でした。本当に岡山は映画のまちと言ってもいいくらい、さっきのフィルム・コミッションではないけれど、映画が盛んだし、ハレノワができたことによって、舞台芸術がすごく活気づいているので、舞台芸術のまちにしてもいいのではないかと、文学が一番最後でもいいのではないかと思うくらいです。先ほど佐々木先生が言われた「文学を核とした総合的な文化が息づくまち」とすると、すごく広げられるなということはありません。

**野田** 本当にそうですね。文学って割とオタクが読むものというか、狭められたイメージに考えていると思うのですが、後程僕もプレゼンしますが、本来、文学という幅をもう少し広げて考える、たとえば、脚本や詩、漫画だってありますし、演劇や映画の脚本というのは文学だと思います。「本」って言うじゃないですか。映画も演劇も、「本はできたの？」とか言いますよね。そこが出発点なので、本に着目していくということだろうなと思います。

それから、雑誌はとてもしつながりがあると思います。その辺の話はいかがですか？

山川 一方で出版業をしながら僕が直接かかわっている、『聞く、書く。』という 120～130 ページの冊子があります。これは全部聞き書きで、地元の人たち、特にお年寄りの人たちに戦前、戦後の話などを会員たちが聞き取って、それを文字にしたもので、4、5年に1回、ちょうど今12号を編集しているところです。こういったものをつくっています。

それからまちづくりに関して言えば、公益財団法人福武教育文化振興財団という、先ほどのベネッセが関係している教育と文化を中心とした地域の財団があるのですが、20年くらいその仕事をずっとやってきて、これはちょっと古いのですが、県北の真庭市にある勝山という「のれんのまち」として知られているところのまちづくりについて、関係者3人にインタビューして聞き書きでつくったものがあります。

これはまさに、地域でのまちづくりの活動そのものの記憶を記録として残していくのが、僕が地域出版社をやっていく上で、一つの目的にしていることです。さきほどの田口さんの温泉と本の話で、1年で7万本売れるような本がつかれるとしたらすごいなと思っていました。田口さんが言われた今どきなのが、城崎でしか買えない本ということだと思います。これはひとつのキーワードで、岡山で本をつくっていて、初期の10年間で苦労したのは地方出版では岡山でしか本が売れないということです。日本の出版業は、東京に集中しているわけですね。7、80%は東京にあって、その流通がアマゾンなどのネット書店ができたことによって、少しフラットにはなっているのですが、地方出版が苦しいところはそこなのです。それが徐々に温泉と本などのような形で地元でしか買えないけれども、いいものができれば売れる。それと、一人でも出版社はできるというこの2点は、これからの出版業界を変えていくのだろうと思います。

今川 市立の文学館があることの良さは、利益優先でなくてもいいことです。そこがすごくありがたいと思っています。先ほどまちの風土や歴史を深掘りして、文学の場合で言えば、例えばこのまちでの同人誌の歴史などでは、まず資料を重要視します。それで図録をつくります。その図録を1部500円くらいで販売するのですが、これは売るといっても遺していく、このことがまちの歴史を刻んでいくことになるのですね。

例えば当時の人々の暮らしやこういう産業があったというよりも、小説で書かれることの方が、ずっと臨場感があります。それを遺していくというか、その資料はもしかしたら100年後にしか開かれることはないかもしれないけれど、それでも私たちは遺していきます。どうしても出版やそういう民間のお仕事だと、買っていただかなければならないのですが、市の直営の場合は、売れなくてもいいというつもりでやっているわけではないのですが、収益を上げることも、遺していくことを大事にしています。もちろんデザインから内容も含め、私たち一生懸命やるのですけれども、いかに遺していくかを目指しています。文学の分野で、例え有名な作家になっても、同人誌活動をやってきた人たちの作品も資料として、ちゃんと遺していくというか、それがまちの歴史を語るということではないかと考えています。

絶版になったものも、文学館文庫として、復刊し、700円や1000円で販売します。そういうこともできるというか、それは普通の出版社では復刻したり、復刊したりということは困難ですが、それができるということはありがたいことだと思っています。

田口 「本と温泉」に関しては、完全に町おこしで、PRにつながればというところで、当初は売



れなくてもいい、話題になればいいなという形だったのですけれども、先ほど山川さんがおっしゃったとおり、結構議論があったんですね。やっぱり全国に流通させて、それを読んでもらって城崎に来てもらうという流れをつくるほうがいいのではないかという話もありました。でも、そうすると圧倒的にコストがかかってしまうということと、やはり制約がすごく大きくなる。たぶんこのタオル本を東販や日販に持って行って、1万部つくって全国に流通させてくださいと言ったら、ふざけるなといわれると思うのですね。これを流通させないということによって、かなり自由度が増しました。いわゆる ISBN コードなども取らなくていいですし、どんな装丁にしても、それから通常本は、商売の話で恐縮ですけれども、1000円で売ろうと思ったら、たぶん経費を300円とか400円に抑えなければいけないと思いますが、儲けなくてもいいNPO法人なので、たぶんこれ8割くらいが経費なのです。ある意味商売を度外視してものをつくれるというところに、逆に小説家の方やデザイナーの方がおもしろがって付き合ってくださいるところもあると思います。

**野田** それでは、私からおせっかいな議論をしてみたいのですが、今、僕は電子書籍で読むことが多いですね。つまり本というと、伝統的には紙に印刷したものとして流通してきたわけですが、これからそういうことと共存するのか、役割を分担するのか、それとも本にこだわるのか、その本しかできないものでやるのか、あるいは情報のところは、今、ほとんどの人がインターネットで情報検索するでしょうから、そことどういうふうにやっていくのという話があって、デジタル化と本ということについて、何かお考えをいただけますか？

**今川** デジタル化といえば、資料は今、デジタルアーカイブ化をしなければいけなくて、すごくお金がかかります。資料も全国どこからでも、国会図書館からでも取り寄せられますよね。ということは、当館が所蔵している資料も、お見せできるようにしておかなくてはならない。そのためには、デジタル化は大変ですけれどもやらなくてははいけない。

そのうえ作家の資料というと、直筆のものが求められます。今までは、文学館の展示といえば、直筆のものでした。それが今やほとんどパソコン入力になっていますが、それでもリリー・フランキーさんから『東京タワー、オカンとボクと時々オトン』という作品の650枚の生原稿をいただいています。彼は直筆です。

また、平野啓一郎さんからは、使っていた初期のワープロを寄託していただき、それを展示しています。おっしゃるように、私はどちらも残る、紙の方も絶対に残ると思っています。文学作品においていえば、今、生成AIを使って応募してくるということもあるので、IT革命によっていろいろ影響が出ているのは確かですが、しばらくは両方必要かなと思っています。個人的には紙は残ると思います。

デジタル化についてはそう思っているということと、文学がなぜ必要かということ、ここまでITだったり、ロボットだったり置き換えられてきたときに、最後の人間の尊厳や想像力、そのところのぎりぎりのところで踏ん張れるのが文学だと思っています。それで、岡山市の文学での創造都市というのは本当にうらやましいと思いますし、ここで、これからは子どもたちをどう育てていくかということになると思われますが、そこでも文学の力というものを信じたいと思っています。

野田 田口さん、山川さんはどう思いますか？

田口 基本的に「本と温泉」としては、本にこだわっていこうというのは、メンバーの同意が得られていますね。とはいえ、これは本なのかといわれると、どうかなというものもつくっているのですが、ただ、質感があるということはすごく大事なことではないかと思っています。

ちなみに、「タオル本」は、中はお湯にぬれても破れない紙に印刷しています。城崎には7つの外湯がありますが、このタオル本に関しては、一応その中で読んでもいいよということになっています。本を読んでいると汗をかいてくるので、これでちょっと拭いたりすることもできます。

おそらくこういう部分はデジタルでは代替できないだろうなということで、体験も含めて読書を楽しんでいただきたいという部分は我々も持ち続けたいので、デジタルのパッケージの商品を出すという可能性はなきにしもあらずだと思いますが、今ある本をデジタルにして広く流通させるということは、戦略としてないだろうなと思っています。

あと、やはり先ほどから「記録として記憶を残す」ということが再三出てきていますが、それには、結局紙が一番強いだろうなと思いますね。デジタル、僕もキンドルなどでも買いますけれども、いつの間にか読めなくなっていることもありますから、やっぱり残すのであれば、本、質感のあるものというのが、強いというふうには思っています。

野田 それでは、最後の一巡になりますが、まさに今、岡山市が文学創造都市としてスタートを切ったその瞬間ですけれども、ではこれからこういうことをやったらいいよ、こういうふうになったらおもしろいのではなど、これからできるであろう全国の文学都市に向けて発信できることを考えたいと思います。何か、岡山市に対して提案というか、アイデアというか、これに取り組んだらいいよということがあればお話してください。ジャストアイデアでも結構です。

田口 そうですね。志賀直哉はじめ昔の文豪や小説家は、よく籠って書くということを言われますが、実際にそういう活動をされていたと思うのですね。城崎国際アートセンターができるときに、これはアーティスト・イン・レジデンスの施設なのですが、「アーティスト・イン・レジデンスってなんやねん」という話になったのですけれども、結局、昔から城崎がやってきたことだと、要は城崎には文豪だけでなく、書を描く人や絵を描く人もいらっやって、一筆書いて、宿代をチャラにしたというような歴史があるわけですね。そういうことはなかなかやりにくい時代だから、そこは行政が担保してやろうというのがアーティスト・イン・レジデンスです。やはり地域にそういう「ものをつくる人」たちが来て、何かやっていくというのはものすごく波及効果があるなど、アーティスト・イン・レジデンスの館長を6年間やったものとしては思います。

岡山は、佐々木先生が先ほど地震がないところとおっしゃっていたし、非常に温暖なところでもあり、長期滞在できるような場所があるなら、必ずしも岡山にまつわるものでなくてもいいので、そういう活動をやってはどうかでしょうか。ただ、これは個人ではなかなか難しいと思うので、行政と連携してそういった「ものをつくる方々」が、とにかくこの地に来れば、いい作品が生まれるという拠点をつくっていけると、非常にいいのではないかと思います。

野田 「アーティスト・イン・レジデンス」ですね。

今川 先ほどは少ししかお話できませんでしたが、「子どもノンフィクション文学賞」は、選考委員にあさのあつこさんに来ていただいています。あさのあつこさんと、最相葉月さん、リリー・フランキーさんです。あさのあつこさんは3年目になります。それまでは児童文学シリーズ「ズッコケ3人組」の作者・那須正幹さんをお願いしていました。

子どもの作品というのは、やはり何か心を打たれるものがあり、岡山市には坪田譲治文学賞が根底にありますから、これからを担う子どもたちを育てていけるような、何か文学と子どもを結びつけていけるようなことをされるといいのではないかと思います。

子どもたちは将来的には地球を担っていく人に育っていけよう、大げさにではなくて、片隅でも担っていく大人になっていけようと思うので、ぜひ岡山市でもそういう取り組みをなされてはと思います。

野田 山川さんはいかがですか？

山川 昨年の秋に、ユネスコの創造都市ネットワークに加盟できて以降、考えているのは、本当にこれからどうしていったらいいのだろうかということです。一介の市民の私がこういうことを考えるのもおこがましいのですが、この間、よく言われてきた「岡山が文学のまちなの？」という疑問に対しては、今、文学のまちかどうかということではなくて、これから文学のまちにしていきたいし、なっていくのだというその過程を楽しむ市民でありたいというのが1点です。

まだ、岡山は十分文学のまちだと胸を張って言える状態ではないのではないかと思います。一つの問題意識としてあります。では、今後どうしていくかということで、今、すでにスタートしているのは、「岡山文学フェスティバル 2024」という形で、昨年に続いて今年も楽しいブックイベントをやっというこです。今回は ZINE スタジアムという小冊子の展示販売も新たに加わり、それから「ライター・イン・レジデンス」がスタートしていて、始めたばかりですが、乗代雄介さんという若い作家の方に来て書いていただいたり、ZINE スタジアムで話をしていたりということで、若い作家の育成につながることを考えています。

もう一つの問題意識としては、先ほど「みんなの表町書店」というものをつくったという話がありましたが、どこの町にもある中心市街地の商店街が続けていけるかどうか、空き店舗もあつたりしますが、例えば表町が本当にブックストリートというような呼び方で、小規模出版社やデザイン事務所やギャラリー、ブックカフェなど文学を核にしたような賑わいのある場所に育っていくのが、表町の新しいあり方としていいのではないかと思います。

それで、3つの柱を考えました。今後の岡山の文学創造都市としては、まず「拠点づくり」ですね。文学や本を軸にした、人と情報が交流する拠り所というか、城崎のアートセンターではないですが、そういう拠点のようなものがほしいと思っています。

それから二つ目が「にぎわいづくり」です。文学や本を核に人が集まるハード事業やソフト事業です。文芸小学校なども毎年開催して、いずれは国際文学フェスティバルという国際をつけた形で、少なくとも東アジアの人たちが来てくださるような文学フェスティバルにしていきたいと思っています。



もう一つは「人づくり」ですね。文学をはじめとした創造的な人材の育成につながるような取り組みです。城崎は学校をつくりましたけれども、そういったものに学んで、作家だけではなくて、本をつくっていくには編集者もデザイナーも、写真家や校正者などそういう人たちも必要になるので、そういう人材を育成するような人づくりの場、そういったものをつくって総合的な舞台芸術や映画などといっしょに豊かになっていくような岡山にしていけたらいいなと思います。

**野田** ありがとうございます。「拠点づくり」「にぎわいづくり」「人づくり」。空間をつくって人が集まる仕掛けをやって、それから人材を育成していく。基本的なことはすべて入っているなと思います。これはじっくりゆっくりやっていけばいいと思いますね。ありがとうございます。

時間もきましたので、最後にまとめに入っていきます。先ほど、佐々木先生のキーノートの中に出てきた、チャールズ・ランドリーという『クリエイティブシティ』という本を書いて世界にその概念を広めた人がいるのですが、彼が 2000 年にロンドンで発売した『THE CREATIVE CITY』という本の中に、本によるまちづくりの事例が出ています。そのまちはユネスコには入っていません。とっても小さな人口 1400 人の村だそうで、ヘイ・オン・ワイと言います。ウェールズにある小さな村で、ここにリチャード・ブースという人がいて、廃屋になったお城を買ったんですね。そのお城に古本屋を開業しました。そうすると、お城に古本を買いに行くという体験がおもしろかったのでしょうか。結構たくさん人が来るようになって、このまちに古本屋さんや本屋さんがだんだん広がって行って、とっても活気のあるまちに変わっていったそうです。

ランドリーがここでなんとやっているかということ、最初は、ばかげた考え方だとか、非現実的だと言われるかもしれないけれど、条件があえばそんなことも現実には起こり得るのだよということを書いていました。ですから、よく日本の地方都市でお年寄りが言うことですが、「そんなこと言たって」「ばかげている」「ありえない」というようなことですら、否定しないということが大事ななと思います。

クリエイティブシティネットワークをユネスコが立ち上げたのは 2004 年です。文化多様性条約というものがあるので、文化について実際に具体的に動かしていくための仕組みとして考えられました。今、これに世界の 350 都市が加盟しています。目的は都市の経済的・社会的・文化的・環境的側面という 4 つのキーワードにおいて、創造性を持続可能な開発の戦略的要素として考えているまち・都市、ここのネットワークです。キーワードは経済、社会、文化、環境、この 4 つですね。そして 7 つの創造産業の分野に手を上げる方式となっており、今回、岡山市さんが日本で初めて文学の分野で認定されたわけです。今、日本では 11 の都市が認定されています。

岡山の友好交流都市であり、かつユネスコの文学創造都市として先行して加盟した韓国のプジョン市（富川市）のアジェンダには、こんなことが書かれています。「国民を文学消費者から文学制作者に変える」。言っていることが大胆ですね。韓国らしいです。そのためにグローバルシティズンシップ教育をやる。図書館の交流を世界的に行うことで、図書館システムを進歩させていく。さまざまな国の文学作品を購入し、その翻訳をして、その出版を各国が行う。

ちょっとコンセプトからは外れるのですが、国際ペンクラブという組織があって、ここは、日本に日本ペンクラブをつくってくださいといってきた大本の組織なのですが、ここでいうペンというのが、pen の略で、劇作家、詩人、編集者、随筆家、評論家、小説家などなど文学に関わるすべての著述家のことを指しています。

今日、城崎の話が出ましたが、神奈川県茅ヶ崎市もユネスコの認定を目指しています。実は私は茅ヶ崎の委員をやっているのですが、どうせやるならやはり初物でいこうねという話になって、文学でいこうと準備していました。それが岡山市さんに先にいかれたわけですが、本当によかったなと思っています。もし、今回岡山市さんが外れていたら、来年茅ヶ崎と戦わなければならなかった。先輩都市ができてよかったなと思っています。

少しだけ、茅ヶ崎の話をして。歌舞伎俳優の9代目市川團十郎が茅ヶ崎に別荘を建てました。そうしたら新派劇の創始者である川上音二郎が、團十郎の隣に住みたいと言って、土地を買いました。本宅を建て、さらに演劇学校を立ち上げようと思ったそうです。

時代は飛びますが、茅ヶ崎館というものがあって、旅館です。ここに小津安二郎が、毎回逗留して脚本を書いています。2番のお部屋というところで、今は、是枝監督がオマージュして使っているそうです。これは先ほど田口さんがおっしゃったことですね。一種のアーティスト・イン・レジデンスです。

旅館の茅ヶ崎館の当主の方(5代目)が、茅ヶ崎映画祭というものを開催しています。これもだんだんと発展して、なかなかいい映画祭になっています。

開高健記念館もありまして、一応文学ネタはそれなりに揃っていると言えます。加山雄三や、サザンオールスターズも地元では人気なのですが、国際的な知名度はないよねという話になっています。申請に向けての中間報告でしたが、ぜひ文学創造都市の先輩として岡山にはアシストいただけるとありがたいです。

文科省にいて相談しています。目玉はなんだよということになり、目玉はこれですよと、高田畹安というお医者さんがつくった東洋一といわれている規模の、結核の人たちが過ごすサナトリウムがありました。東京で作る計画があったのですが、反対運動にあって、東京から離れた茅ヶ崎にできました。そこにたくさんの文人が入りました。小説家には肺炎の人が多かったので、こういう人たちが入っていたということがあったようです。茅ヶ崎市に寄贈されており、ここでライターズ・イン・レジデンスができないかという話をしています。

今日、茅ヶ崎市の人がここに来ているので、先ほど聞いたら、なんと坪田譲治もこのサナトリウムに入っていたそうです。岡山市と茅ヶ崎市には、ちゃんとつながりがあったということがわかりましたので、自信をもっていきたいと思っています。

最後は茅ヶ崎の宣伝で終わりましたね。新しい分野に切り込んでいくのはいいことだなと思っています。先ほど山川さんから「岡山が文学のまちなの？」とよく聞かれると聞いて、私も少し安心しました。今、文学のまちかどうかということではなくて、これから文学のまちにしていきたいということで、あまり深く考えすぎないほうがいいのかなと思いました。

それでは、シンポジウムは1度これで締めたいと思います。

**司会** ありがとうございます。それでは、佐々木先生コメントをいただけますでしょうか？

**佐々木** みなさんご苦労さまでした。北九州市も、本来ならもうちょっと早く文学でユネスコに申請したかったわけですし、それから豊岡はエディンバラフェスティバルまでいかなくても、十分総合的なフェスティバルの都市としてやっていけるのではないかと今、改めて思いました。

結局、音楽は言葉や国境を越えやすいですし、工芸も素材があるので、国際フェスティバルがやりやすい。文学は、音楽や工芸と違って「言葉」ですから、日本語の壁を越えられるかどうかという点では、難しいですが、ユネスコのネットワークというのは、世界的な、世界の都市にどう貢献するかという話が一方でありますから、どのようにそれにチャレンジするかが求められます。

今日、紹介したエディンバラにしろ、メルボルン、バルセロナにしても世界で出版点数が一番多いのは当然英語で、その次はスペイン語ですから、メジャーな言語というのは、その領域です。国際的な文学、シンポジウムやブックフェスティバルなどが成立するのですが、日本語のエリアというのはそんなに広くないので、それをどうやってユネスコのネットワークの中で広げていくのか、翻訳なり自動翻訳のような形でいくのか。そういったところにこれから先はぜひチャレンジをしていきたいと思います。

併せて、その手がかりというか、ステップの一つとして、実は東アジア文化都市という事業を2014年から始めています。これはヨーロッパの欧州文化首都事業と連携を持ちたいので、それに対して、日中韓でお互いに協力して実施していく事業です。北九州に一生けん命やっていたきました。日本と中国、韓国の主に3都市の文化交流を軸にしているのですけれども、岡山市も東アジア文化都市を何度か経験してほしいと思っています。それらの上にユネスコの世界会議なり、あるいは文学ジャンルのサブネットワーク会議、そういったものを成功させて、国際的なプレゼンスを高めていく。地道な文学を核としたまちづくりの活動と世界的なネットワークを確立する活動、この両面で考えていただけるといいなと思っています。応援します。

**司会** せっかくの機会ですので、質疑応答の時間も取りたいところではありますが、おひとりどなたか最後にコメントでもご感想でも結構ですから、おありであればいただきたいと思います。いかがでしょうか？はい、それでは、お名前をおっしゃっていただいてからコメントをお願いいたします。

**中原** 岡山市の市民生活局長の中原でございます。今日はじっくり話を聞くようにと、冒頭に市長より申し付けております。先生方本当にありがとうございました。ぜひ参考にさせていただきますと思います。

最後に、締め括りにおっしゃってくださった、我々が地道に皆さんに文学のすばらしさを伝えるという、そういう活動と世界と直接つながる機会を得たということで、世界に向けてしっかりと発信していけるように、日々精進したいと思います。商工会議所の方々とも、ぜひ力を併せてがんばりたいと思いますので、よろしく願いいたします。本日はありがとうございました。

**司会** それでは、本日コメントをいただきました皆様、それから佐々木先生に拍手をお願いいたしまして、これでシンポジウムをお開きとさせていただきますと思います。

今日のシンポジウムが、これからの岡山の化学反応のきっかけになれば幸いです。これからもぜひ皆様協力し合いながらがんばっていただければと思います。本日はどうもありがとうございました。



“生活文化創造都市推進事業”  
**生活文化創造都市フォーラム「岡山地域会議」実施報告書**

---

2024年3月発行

編集・発行 一般財団法人 日本ファッション協会  
〒101-0051 東京都千代田区神田神保町1-5-1  
神保町須賀ビル7階  
TEL 03-3295-1311 FAX 03-3295-3295



